

## ネパールヒマラヤ・ランタン溪谷訪問記

小林 俊一\*

Report of visit to Rangtang Valley, in Nepal Himalayas, 1987

by

Shun'ichi KOBAYASHI

### I はじめに

1950年のネパール開国により、世界中の登山隊によってネパールヒマラヤの水河に関する情報が数多くもたらされた。氷河は地球科学の分野から注目され研究されてきたが、氷河自身天然の貯水ダムとして有効である。すなわち、氷河からの流出高は、変動が少なく、最大流量と最小流量の比は26程度しかないと言われ、日本の一般の河川に比べると非常に小さい。

最近、新潟県の豪雪地帯では雪ダムを造り、雪の有効利用法が検討されている。こういった情勢にかんがみ、氷河の水文学的諸特性を研究することは、雪ダム構想に有益な情報を提供するものと考えられる。幸い、1985年から文部省海外学術研究「アジア高山地域に於ける比較氷河研究」(研究代表者・樋口敬二・名古屋大学教授)が続けられており、1987年は第2年次の調査にあたるのでネパールヒマラヤのランタン溪谷の氷河調査隊に合流し研修する機会を得たので報告する。

### II 行動の概要

昭和62年7月15日北海道大学低温科学研究所の山田知充博士(調査隊リーダー)等と成田を發ち、途中タイのバンコックで一泊した後、16日ネパールの首都カトマンズに到着した。カトマンズではレストランを經營している高久幸雄氏宅の3階に間借りをし、出発の準備、各省庁の根回しを兼ねた表敬訪問が根気良く行われ、結局、カトマンズを出発したのが7月28日であった。この間のカトマンズでの生活環境、各省庁での根回し状況等は日本では経験出来ないものばかりで興味深いのが記載は省略する。

カトマンズからはバスを借り切って図-1の経路に従ってランタン溪谷へと旅することになる。バスはトリスリバザール(Trisuli Bazar)までしか人間と荷物を運んでくれず、結局、トリスリバザールからドンチェ(Dhunche)ま

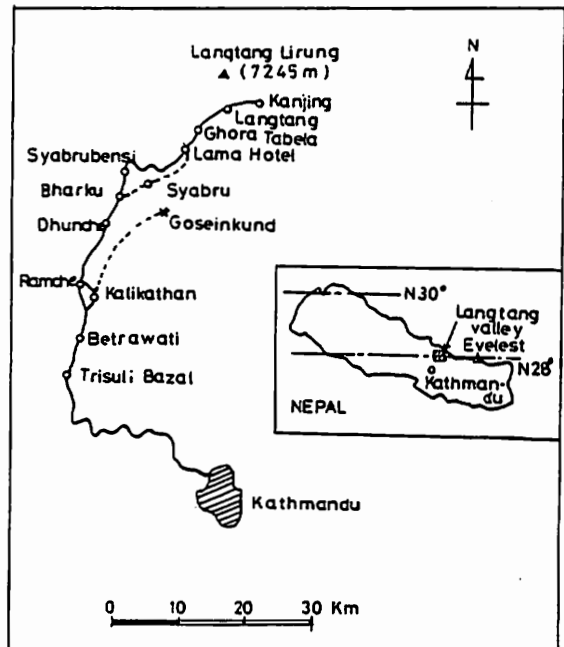


図-1 行程図

\* 新潟大学積雪地域災害研究センター

では人間は別のバスに乗り換え、荷物はトラックに積み替え、その日の夕方ダウンチェに到着した。ここで荷物を運搬してくれるポータ探して2泊し、30日に昨日から続いている雨の中を朝7時出発する。予定ではダウンチェ→シャブルゥ (Syabru) 経由で行くはずであったが、シャブルゥ付近で大きな地すべりが発生し不通とのことで急拠シャブルベンシー (Syabrubensi) 経由で行くことになった。ランタン川 (Langtang Khola) をはさんでシャブルゥは左岸、シャブルベンシーは右岸沿いということになる。ネパールはこの時期がモンスーンで雨期にあたり方々で地すべりが多発し多くの人々が死んでいると英語を話す宿の主人が語ってくれた。途中バルクゥ (Bharku) で一休みし、シャブルベンシーに午後3時に着く。早く着いたが我々の案内人で水文局に勤めるPathak氏からここで行っている水文観測地点に案内してもらう。水位計と水深を測るために人が乗れるケーブルがあるだけの簡単なものであった。

宿の女主人がすてぶる美人で気に入ったが、夜はシラミとダニで悩まされた。翌31日は小雨の中を急な登りと細い山道を急行軍する。途中、対岸のシャブルゥの大地すべり跡を遠望しながら、転んで右足を軽く挫いたり、ヒルの出現に悩まされたりしながらも午後4時にラマホテル (Lama Hotel) に着く。すっかり疲れ切ってしまい夕食までの時間シラフに入って眠る。ここでは夜は、ゴキブリの大群とシラミ、ダニで悩まされた。ラマホテルと言っても、電気もないカヤぶきの小屋である。ここからは、発生したばかりの地すべりの上を横断、ポータ達も殺気だっている。急な登りのモレーンを越えると開けた谷で高山植物の花が咲き乱れ、カルカ (遊牧小屋) が点在する。ここが世界で最も美しい谷の一つと絶賛されたランタン谷である。これまでのシラミ、ダニ等のことは忘れて周りの景色を堪能する。ゴラ・タベラ (Ghora Tabela) には、ランタン村の村長が建てたこの辺にしては立派なホテルがあり昼食をとる。この日は午後4時にランタン村に着いたが、村はもぬけのからで病人と老人のみが残っている。この先のキャンジン (Kyanjing) に祭りのため総出で出掛けている。老人の寝ている一軒に上がりこんで待っていると、酒に酔った主人が老人を見回りに戻ってきたので、ジャガイモをふかしてもらい唐辛子と塩をつけて食べる。空腹にはとても美味しかった。翌8月2日霧の中を朝7時に出発。3,500m付近で軽い高山病にかかり頭痛がする。キャンジンには9時に着く。標高3,800mのこの地にはゴンバ (寺) やチーズ工場があり、更にスイス人の建てた山小屋があり、ここが我々の拠点となる。

脈拍が130位に高まり頭痛が激しくなる。寝ている間、頭が割れそうで吐き気もするので翌3日は雨の中をゴラ・タベラまで下り一泊する。頭痛が無くなり翌日快晴で再度キャンジンを目指す。途中、写



写真-1 ゴラ・タベラ付近の古い地すべり跡  
(1987年8月4日)

真-1に示した古い地すべり跡を見る。左手にはランタン・リルン (7,245m) の白い頂きが輝いている。どこまで登っても頂上が見えない今回の旅で、初めて世界の屋根を見た感動は表現のしようがない。神々の住む頂きという表現は誇張でもなんでもない自然な感じ方だと思った。夜はキャンジン・ゴンバの不思議な壁画に囲まれた部屋で輪になって踊る老若男女の中に、チャン (地元の酒) を飲みながら座していると、遠い日本の祖先の踊りの輪の中に居るような、不思議な体臭とリズムが直接つたわってくる。

8月4日から8日まで、調査隊の気象観測地

点や水文観測地点を見学する。電気の無い観測なので、それぞれの測定器械には工夫がなされている。我々の行っている山間地での地すべり研究にもすぐに使えるものがあり、細かい点まで見学する。氷河までの行動が息が切れ頭痛を伴う。軽い高山病にかかっている。結局、キムジュン氷河、リルン氷河へはモレーン上まで、ヤラ氷河へは皆に遅れ、霧が出て視界が悪くなったので一人でベースキャンプに引き返した。これまで、南極、アラスカ、パタゴニアの氷河調査に参加してきたが、ネパールの氷河調査では高度順化に手間取り、短期間の滞在では、氷河にも触れることが出来なかったことが残念であった。それとともに、水と食べ物にも慣れずに下痢が続いた。8月9日は雨の中を帰路に着く。同行者は水文局のパタック氏とシェルパーのガネッシュの三人である。まだ動きつつある地すべり上をトラバースする。流されれば、下は濁流の渦巻くランタン川で命は無い。大きな岩の転がる音が川の中から聞こえてくる。ラマホテルに一泊して、10日ドゥンチェに着く。ここからはバスに乗るが、途中小さな地すべりが到るところに発生し、バス待ちの人々で溢れている。11日それでも朝8時にやっとバスは出発したがすぐに前方に地すべりがあり全員バスから降りて土砂や岩の除去を手伝う。結局こんなことを繰り返しながら、午後4時半頃前方にやや大きい地すべりがありバスは進めなくなる。今度はハッパの音が聞こえてきた。結局、カリカサン (Kalikathan) まで歩くことになった。途中、前方に土石流跡を見る (写真-2)。



写真-2 カリカサン付近から撮した土石流跡地  
8月10日11時頃発生し一村が全滅したらしい  
(1987年8月11日)

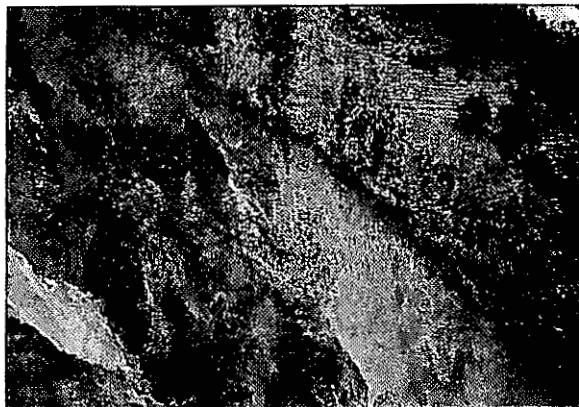


写真-3 ベトラワチ付近の地すべり崩壊地  
地すべりは直ぐ下のトリスリー川に落ちて  
いた (1987年8月12日)



写真-4 写真-3の地すべり崩壊地頂部の亀裂  
写真の右側が崩壊地 (1987年8月12日)



写真-5 ドゥンチェーカリカサン間に見られ  
た地すべり対策工 (1987年8月11日)

パタック氏によると、昨日夜11時頃土石流のため一村がほぼ全滅し、11人が死亡、7家屋が流失したとラジオのニュースで伝えていたと話してくれた。村の名はGoganeと言っていたが、持っている地図では不明であった。カリカサンに一泊し、12日も雨の中を朝6時に出発し、歩いてトリスリバザールに午前10時頃着く。途中、ベトラワチィ(Betrawati)で写真-3のような比較的大きな地すべり崩壊の頭部を横切る。そこには生々しい亀裂(写真-4)があり、それを横目に見ながら急いで通りすぎる。トリスリバザールからは定期バスに乗ってその日の夕方5時にカトマンズに無事着いた。8月15日までカトマンズで骨を休め、帰路はバンコックに二泊して19日成田に帰った。

### Ⅲ あ と が き

今回の旅行では、氷河上に達することが出来なかったが、途中、地すべり地帯を通過し、貴重な体験が出来た。この期間、地すべり防止対策工事としては、写真-5に示したような金網で石を包んだ階段壁を見たに過ぎなかった。

又、ネパールでは氷河の融水は濁流となって流れ、ネパールの国内には有効に利用されておらず、インド平原部を潤しているのではないかと帰路の機上から遠望した風景から感じた。氷河融水の利用と地すべり対策はネパールにおいてこれから解決されなければならない問題の一つではないかと感じた次第である。

終わりに、この研修旅行に快く参加させていただいた名古屋大学水圏科学研究所の樋口敬二教授と現地でいろいろ御教授いただいた北海道大学低温科学研究所の山田知充博士と本山秀明博士他隊員の皆様に深く感謝いたします。